

「音楽の都」ウィーン



= Midori

ウィーン昔話

ウィーン一区のまわり、今日リンクシュトラッセとなっている所に一八五七年まで城壁があったことは、御存知の方も多いだろう。町を外敵より守る事が城壁第一の使命だが、同時にその門から出入りする人間から通行料をせしめ、支配者の財源とする目的も持っていた。それらの名前は城壁がなくなった現在でも、たとえばショットントア、ブルクトア、ケルントナートア（トアとは門のことである）などと、地名になって残っている。

ウィーン古典派の全盛時代（一八〇六年頃）、この城壁のすぐ外側に八十四の集落があった。現在二十三あるウィーンの区それぞれにつけられている「ファヴォリツテン」とか「ヴェーリング」「ヒッツィング」などの副称は、当時からの名残りである。その郊外には、さらに百六十程度の村々があったという。

税金は人にかげられる一方、城門を通過するいろいろな流通品にもかげられた。音楽に関係のあるところで、当時非常に発達したピアノ製造業を見てみよう。

ピアノ製造業者は、その工房を決して城壁の内側に持とうとしなかった。ピアノを作るために必要不可欠な木材が課税対象品だったからである。しかしいつの世にも抜け道はあるもので、完成したピアノは「家具」という名の非課税品として城門の内側へと運ばれていた。

モーツァルト時代（一七五〇年頃）のウィーンは、人口二十六万ぐらいの都市であつたらしい。非公式にはその倍、あるいは六十万人程度は住んでいたというが、国勢調査のようなものは当時全く行われなかったため、正確な数字は憶測する以外に方法がない。（ちなみに現在のウィーンの人口は百六十万弱である）この数字にみられる幅は、庶民の本能ともいえる「税金はなるべく払いたくない」という心情の反映であ

る。というのも、城壁外側のどの村落までが公にウィーンに属するか、との判断は、とても困難な課題であった。ウィーンに属すればそれなりの利点はあったにせよ、住民の数に依じて課税が行われた。そこから少しでも逃れるために、人口は概して少なめに申告されていたようである。また可能でさえあれば、帝国の首都ウィーンの一区分として統治されるのではなく、小さいながらもひとつの独立した地方自治体としての道を希望する村落が多かった。このため実状にはそぐわない事ながら、ウィーンの統計上の規模は、十八世紀当時のほうが十六世紀初頭に比較してかなり小さくなっている。

ベートーヴェンやシューベルトの時代、城壁で囲まれていたウィーン中心部には約六万七千人の人が住んでいたらしい。日本の皇居と似たりよったり、たかだか二平方キロメートル程度の広さの土地にこれだけの人間が住んでいたとすると、これは大変な過密都市である。（現在の一区は約三平方キロメートルの広さがあり、そこに二万人弱が居住している）

ウィーンの活動をこの城壁で区分するのはあまりに窮屈だということで、一八〇八年にウィーンの範囲が改めて指定しなおされた。ウィーン西側の外郭をハイリゲンシュタットからヒュッテルドルフまでギュルテルとほぼ平行して走っている「フォアオルト・リニエ」と呼ばれる電車の線路は、一八七六年まで「リニエングアル」と呼ばれていた境界線跡に架設されたものである。まだ草原だった境界の要所には軍隊が駐留してウィーンの安全を守っていたが、特に緊張した事態がない限り、かなりのんびりとした警戒網であった。シューベルトが友人と連れ立ってこの境界の外の野原までぶらぶらと散策を楽しんでいるところなどからも、その様子がうかがえる。

ウィーン楽友協会が設立されたのはちょうどこの時代、正確には一八一二年の事である。協会発足には楽界のそうそうたるメンバーが携わったにもかかわらず、会の趣旨はあくまでも「愛好家（アマチュア）の集

まり」というものだった。それに違わず協会主催の演奏会はその後一八四八年までの長い間「愛好家のサークル活動」という形が保たれていた。しかし演奏レベルの低迷は如何ともしがたく、ついにはコンサートにプロの演奏家の応援を得なければならなくなった。

協会の例会や演奏会などは当初ヴィルトブレートマルクト Wildpretmarkt 九番（一区）の「赤いはりねずみ亭」で催されていたが、後にトゥーフラウベン Fuchlauben 十二番（一区）の「マットーニホーフ」に七百人程の大きさのホールができ、ここに移転した。このホールは後日ウィーンの音楽の中心のひとつとして栄えたのだ。

楽友協会の一部として音楽学校も設立された。最初にできたのは歌のクラスで、その後ヴァイオリンのクラスも作られた。これが現在のウィーン国立音楽大学の前身である。現在のように大学の建物が別個に確保されたのはかなり最近のことであり、それまでは授業など協会の建物の中で行われた。ブルックナーも教鞭を執っており、彼の下でフリーゴ・ヴォルフやグスタフ・マーラーなども勉強していた。

現在の建物が完成したのは一八七〇年のことである。設計者はテオフィル・ハンゼンだが、彼の設計による大ホールの音響は、設立後百年以上の時間が流れた現在でも世界で右に出るものがない。ブルックナー、ブラームス、マーラー、シェーンベルクなどの作曲家は、このホールでの響きを想像しながら作曲していた。ということは、これらの作曲家の作品はムジークフェライン大ホールで演奏されてこそ、その理想の音響が得られるのだとも言えよう。

このような大ホールが建設される背景には、ウィーンで音楽が愛され、そこそのホールではとても音楽市場の需要と供給のバランスをとれなくなってきた、という事実ももちろんのこと、それ以外にもガス燈による照明や効率の良い暖房設備が発達してきたという点も見逃してはならない。ろうそくの光と単純な暖房器具のもとでは、寒くて暗いウィーンの冬のさなかに、とてもあの大きさのホールの中では我慢できないだろう。

十八世紀、ハイドンやモーツァルトの時代から十九世紀のロマン派の時代、世紀末の爛熟の時代、そして今日に至るまで、長い間ヨーロッパ音楽の中心として栄えてきたウィーン。ムジークフェラインの大ホールで聴く音楽は、まさに「伝統」そのものではないだろうか。

ウィーンフィル

一九四二年に設立されて以来、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団——通称ウィーンフィル——は、常に世界のトップクラスのオーケストラであった。

団員が全てウィーン国立歌劇場管弦楽団のメンバーで構成されているため一見国立のオーケストラのように見えるが、ウィーンフィルそのものの活動は国や市、その他外部からの制約を全く受けないフリーのオーケストラであり、楽団員はこの場において国家公務員ではない。ウィーンフィルの活動は各々の団員が国立歌劇場での義務を果たした上で、いわば余暇の時間を利用して行なわれているのだ。ウィーンでの当楽団の定期演奏会が日中に行なわれる背景にはこうした事情も含まれている。

国立歌劇場での各楽団員のノルマは年間平均約百回のリハーサルに加えてシーズン中毎月十七回（コンサートマスターは十一回）の本番、という相当に忙しいものである。

ウィーンフィルの団員は、その上にシーズン中十回のムジークフェラインにおける定期演奏会（二回公演なので実際は都合二十回）と、ジルベスターならびにニューイヤークンサート、それにオーストリア国内を含むウィーン以外の場所での演奏会を約五十回こなしている。

ウィーンフィルとしての演奏会のためにはもちろん相当回数のリハーサルが行なわれるし、テレビ収録や